

## 「けり」の時制面と主観面

—万葉集を中心として—

吉田茂晃

## 要旨

万葉集においては、動詞に下接する場合と形容詞に下接する場合とで「けり」の様相が異なる。形容詞下接の「けり」は終止法ばかりで文中用法（連体法・条件法など）の用例がない。また、時制としては「現在」が多く、どうしても「過去」と見なければならぬものは一例もない。動詞下接の「けり」は「過去」〈現在〉〈超時〉などの時制を表わすが、文中に用いられた用例はすべて「過去」の表現と見なし得る。助動詞「ぬ」と連接して「にけり」となった用例は「けり」全体の半数以上に相当するのだが、この場合の「けり」は動詞下接の「けり」よりも形容詞下接の「けり」に似た点が多い。——これらの事実はすべて、万葉集に用いられた「けり」を「事柄の確かさを認定するための要素」と把握することによって、統一的に理解することができる。「けり」による「事柄の確かさの認定」は、「過去」などの時制としてあらわれる場合もあれば、「詠嘆」などの主観の意味としてあらわれる場合もある。

「けり」は「過去の助動詞」であると、一般には言われることが多い。<sup>注1</sup>しかし、実際の「けり」の用例について見ると、「過去」を表現する例がたしかに存在する一方で、「過去」を表現しているとは言いがたい例が存在することも否定できない。また、「けり」は「詠嘆」

を表わすとも言われるが、そうであるならば、「過去」という時制を表現することと「詠嘆」という主観的なニュアンスを表わすこととは、「けり」の中でどのように結びついているのだろうか。

本稿は、そのような視点から万葉集における「けり」の用例を検討するものである。即ち、万葉集の「けり」はどのような時制を表現しているか、どのような場合に主観的なニュアンスが生じるのか、また、その両者はどのような関係にあるのか、そういったことを中心に考察をすすめたい。

## 一、「状態などを表現する文」と

## 「個別的な出来事を表現する文」

ことがらを叙述する文は、「状態・情意や属性・習慣などを表現する文」(以下「状態などを表現する文」と「個別的な出来事を表現する文」の二種類に分類することができる。<sup>注4</sup>時制辞の用法を検討するような場合には、その時制辞がこの二種類の文のどちらに用いられているかという点に常に留意しておく必要がある。時制というものの自体的持つ意味が、「状態などを表現する文」と「個別的な出来事を表現する文」とで相違するからである。<sup>注3</sup>

状態や属性・習慣などといったものは、本来、時間の経過に伴う変化を予想することのない超時間的なものである。例えば「鉛」という基体に「重い」という性質が属する「鉛+重い」という関係は、いつからいつまでそうだという限定を第一義的には受けない。従って、「状態などを表現する文」では時制という範疇が積極的な意味では問題にならず、時制辞を下接させないそのままの形で〈超時〉（即自的な現在）という消極的な時制を（結果的には）表現することに注。なる。

① （鉛と錫はどちらが重い？）と尋ねられて）鉛が重い。

〈超時〉

② （右手に鉛を左手に錫を持ち比べて）鉛が重い。 〈現在〉

一方、個別的な出来事というものは、それがいつのことであるのかが特定されてはじめて実際に出来事であることができる。従って、「個別的な出来事を表現する文」では常に時制が積極的に問題になる。「個別的な出来事を表現する文」にとつては時制は不可欠の要素であり、注。時制が決定されている」ということが、この種の文にはどうしても必要である。

「状態などを表現する文」と「個別的な出来事を表現する文」の以上のような相違は、時制辞の用法・表現性にも反映される。たとえば、「つ」や「ぬ」のように「状態などを表現する文」には下接できない時制辞もあるし、両方に下接する時制辞でも「状態などを表現する文」に用いられるか「個別的な出来事を表現する文」に用いられるかによってその表現性が微妙に変化するものがある。現代語の「た」を例にとるなら、

③ やあ、もう神戸駅に着きました。

④ 戦前はこの村もにぎやかだった。

大雑把に言えば③も④も〈過去〉を表わしていると言えるけれども、「個別的な出来事を表現する文」に用いられた③の「た」には「完了」の色合が濃く、「状態などを表現する文」に用いられた④の「た」には主観的な「回想」の調子が強い。これは、「た」という時制辞が「完了」と「回想」の両方を表わす多義語であるからというよりも、「状態などを表現する文」に「た」が用いられた場合と「個別的な出来事を表現する文」に「た」が用いられた場合とで、結果としてそこに立ち現れる意味合いが異なってしまうからだと解釈すべき事実であろう。「た」の表現性について立論する場合には、当然こういったことに対する考慮が必要となる。

本稿で論じようとする「けり」は、時制の（すくなくとも時制との関連浅からぬ）助動詞であり、かつ「状態などを表現する文」と「個別的な出来事を表現する文」のどちらにも下接することができる。この限りでは、現代語の「た」と同じケースなのである。従って、「けり」の場合にも「状態などを表現する文」に用いられたものと「個別的な出来事を表現する文」に用いられたものとで表現性が異なる可能性がある（後に述べるように実際に相違はある）。

以下、「個別的な出来事を表現する文」に用いられた「けり」と「状態などを表現する文」に用いられた「けり」とを、節をわけて見てゆくことにする。

## 二、動詞に下接した「けり」

先ず、動詞の下に直ちに「けり」が接した用例から検討してゆくことにする。多少の出入りはあるけれども、これらは前節で指摘し

た「個別的な出来事を表現する文」に用いられた場合にはほぼ相当する。なお、動詞と「けり」との間に助動詞「ぬ」が介在する「〜にけり」については後節まで保留する。保留する理由もそこで述べる。さて、動詞に「けり」が下接した用例の時制的なあり方は必ずしも一様ではない。「過去」へ「現在」へ「超時」のいずれの用例も認められる。「過去」の例から挙げる。

⑤ 朝柏関八川辺の小竹の芽の偃ひて寝れば夢に見えけり「所見来」(二七五四)

⑥ わご大君天知らさむと思はねば凡にそ見ける「見谿流」和豆香そま山(四七六)

⑦ 常磐なる石室は今もありけれど住みける「住家類」人そ常なかりける(三〇八)

⑧ 大夫の高円山に迫めたれば里に下りける「下来流」鼯鼠それ(二〇二八)

⑤は単純な「過去」であるが、⑥⑦は「過去」の中でも特に現在から切り離されていることの明白な「過去」であると言ひ得る。⑧は「過去」には違いないけれども「完了(動作の終結)」の意味の方が表面化していると言ひべきであろう。また、次のように、単純には「過去」とも「現在」とも言い難い例も存在する。

⑨ 帰るべく時はなりけり「成来」京師にて誰が手本をか我が枕かむ(四三九)

⑩ 少女らを袖布留山の瑞垣の久しき時ゆ思ひけり「念来」我は(二四一五)

⑨は「極めて現在に近い過去の時点における完了」、または「過去に向って拡大された現在における完了」、⑩は「過去から現在にわたる

継続」と見なすべきものであろう。

次に、「現在」の用例は次のようなものである。

⑪ 婦負川の早き瀬ごとに篝さし八十伴の緒は鶉川立ちけり「多知家里」(四〇二三)

⑫ ……浜に出でて海原見れば白波の八重折るが上に海人小舟はららに浮きて大御食に仕へ奉りて遠近に漁り釣りけり「都利家理」……(四三六〇)

⑬ み吉野の石本さらす鳴く河蝦うべも鳴きけり「鳴来」川を清けみ(二二六一)

以上の用例のうち、「過去」の四例の中の⑥⑦の二例と「現在」の三例(⑪⑫⑬)とはある意味では「継続」的な事柄の表現になっているが、⑤や⑧など「継続」的とは言ひ難い事柄の表現にも「けり」は用いられるのであるから、「けり」を「継続」というアスペクトを表現するための要素と考えるのは適当ではないだろう。動詞を述語として表現される事柄には、事実として、一定期間継続するものと継続しないものがあり、「けり」がその両者の表現に区別なく用いられるために、「けり」を用いて語られた事柄の中にも「継続」的なものと「継続」的でないものとの両方が認められるというだけのことであろうと思われる。なお、「現在」の例がすべて「継続」的であるのは、厳密な意味での現在が幅を持たない一瞬であり、そのために、動作的な事柄の全体をその中に位置づけることができず、いま目の前でその事柄が展開中であるということをししか表わせないという、「現在」時制の特殊性によるのであって、これもまた「けり」の責任ではないであろう。

⑭ 隠口の泊瀬の山に照る月は満ち欠けしけり「盈呉為焉」人の

常無き(二二七〇)

⑮ 山城の久世の鷺坂神代より春ははりつつ秋は散りけり「散来」

(二七〇七)

⑯ 不尽の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ゆればその夜降り

けり「布里家利」(三二〇)

⑭⑮⑯は動詞を述語としてはいるが、「月」「久世の鷺坂」「不尽の嶺の雪」に或る性質を認める表現であり、その意味では、これらの「けり」は次節で検討する形容詞に下接した「けり」に近いと言ひ得る。

——以上見てきたように、動詞の下に直ちに「けり」が接した場合、その表現性は時制的にはかなり多様であり、その全用例を単一の時制上の概念によつて統一的に理解することは困難であろうと思われる。「けり」の用例の中には、「過去」でない例も「現在」でない例も「継続」でない例も、すべてがそろつてゐる。

このようなあり方を見る限り、「けり」が特定の時制を分析的に表現する要素であるとは考えにくい。結局のところ、「非未来Ⅱ已然」とでも一括するしかないような広い時間帯の任意の部分を、「けり」は表現するのだとでもしておくよりあるまい。つまり、動詞に直ちに接した「けり」は、一応「時制の助動詞」として機能してはいるけれども、その表現する「時制」はかなりひろく、せいぜい「未来ではない」という一点においてのみ共通している、ということになる。

ところで、動詞の下に直ちに「けり」が用いられる場合、「けり」がどのような時制を表わすかということと「けり」が一文中のどこに現れるかということの間には特定の対応関係が認められる。連体法や確定条件法として文中に位置する場合には「けり」が明確な「過去」

去」になることが多く、一方、「現在」や「超時」を表わす「けり」は終止法として文末に位置していることが多いのである。この事実の意味するところは重大であるけれども、それについては、形容詞に下接する「けり」の表現性を検討した後述べることにする。

### 三、形容詞などに下接した「けり」

続いて、形容詞に下接した「けり」の用例を検討する。これらは第一節に述べた「状態などを表現する文」に用いられた「けり」である。

「けり」が形容詞に下接した場合には、これを時制の面から見れば、明らかに「現在」と見るべきものや「現在」か「過去」か定かでないものばかりであつて、どうしても「過去」と解釈せざるを得ない例は一例もない。従つて、形容詞に下接した「けり」については、これを「過去の助動詞」と呼ぶのは不適當である。

とはいえ、形容詞下接の「けり」を「現在の助動詞」とするのもまた適當ではない。というのは、文としては「現在」を表わすものであつても、「けり」自身が「現在」であることを積極的に決定してゐるのではないからである。形容詞による状態の表現というのは、それ自身において、本質的には超時間的なものであり、現実世界の描写に働いて具体的な時間性を帯びる場合においては現在あるいは現在を含む持続的な状態の表現になるのであつて、「現在」や「継続」を表わすために敢えて「けり」という外在の要素のちからを借りる必要はなく、従つて、少なくとも万葉集においては形容詞に下接した「けり」は時制表現以外の役割を果たしているものと考えられる。その役割とは、「詠嘆」「発見」などの主観的なニュアンスを添える

ということである。

形容詞に下接した「けり」の用例は、万葉集ではすべて終止法として文末に用いられており、文中に用いた例は一つもない。即ち、万葉集における形容詞下接の「けり」は終止法専用なのである。すでに説かれてるように、ある助動詞の現れる位置が文末に限られるということは、その語が主観的表現を担う語であることのあらわれであると言えよう。このことから、万葉集における形容詞下接の「けり」の役割が、時制よりも主観的ニュアンスの側にあることが認められる。

さて、形容詞下接の「けり」が漂わせる主観的ニュアンスは多種多様あるけれども、ほぼ以下のように整理することができる。先ずは、既に指摘されている「詠嘆」「発見（気づき）」の例から挙げる。

⑰ ひさかたの雨の降る日をただひとり山辺に居ればいぶせかり  
けり「爵有来」(七六九)

⑱ あをによし奈良の大路は行きよけどこの山道は行きあしかり  
けり「由飯安之可里家利」(三七二八)

⑰は「詠嘆」、⑱は「詠嘆」と見ることもできようが、どちらかと言えば「発見」であろう。

次の例などは、「詠嘆」でも「発見」でもなく、相手に対する「断言」または「強調」とでも言うべきものである。

⑲ 大夫と思へる我をかくばかり恋せしむるはあしくはありけり  
「小可者在来」(二五八四)

さて、これら「詠嘆」「発見」「断言」という三つの異なる表現性が「けり」に担われ得るのは、この三者とともに基礎づけるような性格が「けり」に存するからであろうと思われる。それは、「その事

柄を確実なものとする」というような性格ではなからうか。出逢った事柄を「けり」によって確実なものとして受け止める、という表現に伴うニュアンスが「発見」、事柄を動かし難いものとして受け入れられる表現に伴うニュアンスが「詠嘆」であり、事柄を確実なものとして相手に指し示す表現に伴うニュアンスが「断言」であると解釈することができよう。

また、形容詞下接の例ではないが、先掲⑬の例や次の⑳のように「うべ（も）」と呼応する「けり」は、「得心」のニュアンスを持つと言える。

⑳ 皆人の恋ふるみ吉野今日見ればうべも恋ひけり「恋来」  
清み(一一三一)

これらもまた、「けり」が事柄の確実さの認定のために働くと考えられることによつて解釈することができる。ちなみに、「うべくけり」の呼応は万葉集中に九例見られ、万葉集の「うべ」の全用例十八例のうちようど半数に相当する。

さらに、万葉集における「けり」を含む疑問文には、「けり」の接した事柄そのものに疑念をさしはさむものはない。この事実もまた、「けり」が事柄の確実さの認定のために働くとする見方を支持してくれる。「けり」を含む疑問文は、次の㉑のように「けり」の接した事柄の理由（事柄そのものではない）に関する疑いを表わすものが五例あるほか㉒の一例があるが、㉒も自分が恋したことについてのとまどいめいた詠嘆を表わしており、恋したかどうかを疑うような表現ではない。

㉑ 武庫川の水脈を早みか赤駒の足掻く激に濡れにけるかも「沾  
祁流鴨」(一一四一)

②② 石上布留の神杉神びにし我やさらさら恋にあひにける「相尔  
家留」(一九二七)

なお、「けり」が疑問文の一種ないし変種としての反語文に用いられ  
た例も、次の例など六例を数えることができるのであるが、

②③ 泊瀬女の造る木綿花み吉野の滝の水沫に咲きにけらずや「開  
来受屋」(九一一)

このような表現は「けり」の接した事柄の確實性をむしろ強調する  
ものであり、「けり」が事柄の確實さの認定に働くとする見方とはい  
ささかも矛盾しない。

#### 四、「事柄の確實さの認定」と時制

形容詞に下接する「けり」は、時制辞としてではなく主観的なニ  
ュアンスを添えるというあり方で働いており、それらの主観的ニュ  
アンスは——「詠嘆」にせよ「発見」にせよそれ以外のものにせよ  
——「けり」に「事柄の確實さを認定する」という性格があると考  
えることによって統一的に理解することができ、ということを中心  
節で述べた。しかし、主観的ニュアンスを添えるために働くのは形  
容詞に下接した「けり」だけではない。

第二節で、動詞に下接した「けり」は一応時制辞として働いてい  
ると述べておいたのだが、時制辞としての働きと主観的ニュアンス  
を添える働きとは同一の「けり」において共存でき、例えば「現在  
の継続」を表わす「けり」が同時に「詠嘆」のニュアンスを帯びる  
などというケースはいくらでもある。即ち、事柄の確實さを認定す  
るという性格は、動詞に下接する「けり」にも認められる。それど  
ころか、時制辞としての働きもまた(主観的ニュアンスを添える働きと

同様に)事柄の確實さを認定するという「けり」の性格から生じたも  
のではないかと思われる。

第二節に述べたように、「けり」の時制的価値は非未来Ⅱ已然の世  
界を表現することにあるのだが、動作・作用としての事柄について  
その確實さを認定してやるということは、時制的にこれを見れば、  
とりもなおさずその動作・作用が已然のものであることの表明とな  
るだろう。形容詞を述語とする文に表現されるような、ある性質の  
帰属関係としての事柄は、時制的には「超時」または「現在」であ  
ることが明らかであり、従って、「けり」による確實さの認定もこの  
ような事柄に対してはただ主観的側面においてある種のニュアンス  
を添えるというあり方で働くしかないわけであるが、動詞を述語と  
する文に表現されるような事柄は、それが個別的な出来事としての  
事柄である限り(そうでない場合はたとえ述語が動詞であつても)状態な  
どを表現する文である)時制が決定されるまでは十全に事柄たるこ  
とができず、そのために事柄そのものが時制の決定を積極的に待ち  
受ける態勢にあり、従って、「けり」による確實さの認定が時制面へ  
と反映されるのだ、と言い得よう。

時制辞としての「けり」は、従って、事柄が已然のものであると  
いったことをしか表わさず、それ以上の細分——「過去」か「現在」  
かといった、或いは「継続」か「完了」かというような——につい  
ては、文脈などに委ねて自らは関与しない。既に前々節に見た通り、  
動詞+「けり」という表現の時制は、未来でないというわずかな一  
致点を残して完全にましまちになるのである。

以上のことから、「けり」による時制の表現と主観的ニュアンスの  
表現とは、事柄の確實さの認定という同一の性格が、表面的に異な

るあらわれを見せたものだと言ふことができる。「けり」の持つている「事柄の确实さの認定」という性格は、「けり」が置かれる環境・条件に影響されて、或る時は時制面が前景化し或る時は主観面が前景化する。両面が同時に前景化することもある。非終止用法の場合は「過去」になることが多く「現在」>「超時」は終止用法に多いというような、第二節に指摘しておいた偏りも、以下に述べるように、「けり」の表現性が外的条件に左右されるということの好例だと言えよう。

動詞に下接する「けり」は「過去」>「現在」>「超時」を表わすが、その中で「現在」>「超時」の用例は常に、「詠嘆」「発見」などの主観的ニュアンスを伴っている。これは、「過去」の事柄の場合には、もはや変更不可能な決定性が事柄そのものに備わっており、「事柄の确实さの認定」を表わす「けり」を用いてその事柄を述定した場合においても、その過去ゆえの確定性が表現されるだけである（あるいは、その可能性がある）のに対して、「現在」>「超時」の場合には、「けり」を用いて語るほどの「事柄の确实さ」を発話主体が自らの責任において「認定」することになるからであろうと思われる。逆に言えば、発話主体が自身に引き受けてその事柄の确实さを主張するような場面以外では、現在や超時の事柄の表現にわざわざ「けり」を用いる理由がないということである。〔現在〕>〔超時〕の「けり」が文末終止法に偏るのはそのためである。<sup>注10</sup>

現代語では「う・よう」などの主観的表現を担う不変化助動詞は常に終止法として文末に位置する。古代語でも「じ」や「らし」などという助動詞は終止法の比率が圧倒的に大きいし、「む」なども非終止法の場合には「仮定」や「婉曲」という客観性の勝った意味を

表わすことが多いが、終止法で用いられたときには「意志」や「推量」という主観性の強い意味を表わす。「けり」の諸用法の中、全面的に主観面で働く形容詞下接の「けり」が文末にしか用例を持たなかったのも、これらと軌を一にする事実であろうと思われる。動詞に下接した「けり」においても「現在」>「超時」の場合は文末に偏るという事実も、それに伴う主観的な意味をもつてのことであろうと考えられる。

ちように助動詞「む」が文中では「推量」「意志」といった主観性を失い、「仮定」「婉曲」という名称で呼ばれる通り専らその事柄が未実現であることの表現のために用いられたように、動詞下接の「けり」が非終止法として文中に用いられた場合には、主観表現としてではなく時制辞としてのみ働くことになる。言い換えれば、確定的な時制を表わす必要がある場合にのみ「けり」は文中に用いられ得る、ということである。このようにして、文中非終止用法の「けり」は「過去」に偏るものと思われる。<sup>注11</sup>

##### 五、「にけり」について

助動詞「ぬ」に「けり」の下接した「にけり」は、万葉集におよそ二百三十例（万葉集中の「けり」の全用例の半数以上）ほどあるが、そのうち終止法以外で用いられた文中用法はわずか四例（一・七％）に過ぎない。動詞（あり）を除くに直ちに下接する「けり」では文中用法の占める割合が二七・五％であるから、動詞の下に直ちに接する場合に比べ「にけり」は文末に大きく偏っていると言わねばならない。「けり」が形容詞に下接する場合には文中用法が皆無であったが、「にけり」はむしろこちらに近い。

「にけり」におけるこの文末終止法への極端な偏りは、この場合の「けり」が（形容詞に下接する場合と同様に）時制面ではなく、専ら主観的ニュアンスのために働いているのではないかということを手想させる。即ち、「にけり」による表現では、「に（ぬ）」がその時制面を全面的に担い、「けり」の方は時制面に関わって積極的に機能するというよりも、「詠嘆」や「発見」などの主観的ニュアンスを添えていると考えてよいであろう。例えば、次の二文を比較してみると

②④ 鶴坂川渡る瀬多みこの我が馬の足掻の水に衣濡れにけり「奴礼尔家里」〔四〇二二〕

②⑤ 家づとに貝を拾ふと沖辺より寄せ来る波に衣手濡れぬ「奴礼尔」〔三七〇九〕

「けり」の有無は、時制の上では、たいした意味を持っていないことが判る。②も⑤もともに「濡レテシマッタ」「濡レテシマッテイル」と訳すところであろうが、それは「ぬ」がもたらした意味にはかならないのであり、②において「けり」が果たしているところの役割は「濡レテシマッタコトダナア」という主観的「詠嘆」を表わすことである。このように、眼前の対象への「詠嘆」などを表わすという点でも、「にけり」は形容詞下接の「けり」に似ていると言えるだろう。

ところで、「にけり」が万葉集に約二百三十例という豊富な用例を持つているのに対して、それとある意味で対をなす「てけり」は、数え方にもよるが、万葉集にわずか三例しか認められない。このアンバランスは、当然のことながら、「ぬ」と「つ」の性格の相違によって生じたものであらうと思われる。

「けり」が（詠嘆、や「発見」など）主観的な意味を表わすのは、対象を眼前にしての表現の場合である。中西宇一氏は、「ぬ」は状態の発生を表わし「つ」は動作の完了を表わすとされたが、これに従えば、「ぬ」による表現は結果として発生済み<sup>（12）</sup>継続中の眼前の状態を表わすことになる。「にけり」の形の表現は、この眼前の状態を対象とするところの、「けり」を用いた「詠嘆」「発見」の表現であると解釈できよう。一方、動作の完了を表わす「つ」を用いて眼前の状態を表現することはできず、従って「つ」を含む句によって表現された事柄を対象として、「けり」を主観の意味で用いる表現は成立たないということになる。

従って、万葉集に「にけり」の用例が多く「てけり」の用例が少ないのは、「ぬ」という時制辞と「けり」という時制辞とが選択的に熟合するからではなく、「けり」による主観表現が「つ」による終結済みの事柄を対象とせず、「ぬ」による発生済み<sup>（12）</sup>継続中の事柄を対象とするからだ、ということになる。そのことはまた次のような事実によって裏面から証せられる。即ち、文中非終止用法の「けり」は、主観性の面でなく已然という時制面でも働くのであるが、こうした非終止用法の「けり」が「ぬ」に承接する例（文中の「にけり」は万葉集に四例しかなく、「てけり」の用例数の三とはほぼ拮抗する、という事実である。つまり、時制辞としての「けり」は「ぬ」にも「つ」にもおおよそ平等に下接するのであるが、主観性文末辞としての「けり」の方はもっぱら「ぬ」に下接し、しかも用例数は後者の方が圧倒的に多いため、「にけり」と「てけり」の用例数に極端なアンバランスが生じるのである。



## 六、「き」との比較

ここで、万葉集中の「き」の用例との比較を試みる。但し、今はいわゆる助動詞「き」のうち、終止形「き」だけに限って取り上げることとし、連体形「し・已然形「しか」については保留することにする。「けり」と共通の語頭子音「k」を持ち語源的にも密接な関連の予想される「き」という形態の終止形だけに、とりあえずは着目してみようということである。

両者の目につく相違を列挙することからは始めるならば、先ず、「き」には形容詞に下接する用法がないという事実が挙げられる。前述したように、「けり」と違って形容詞下接用法は主観面が典型的に前景化する用法であった。その用法が「き」にはまったく存在しないということである。

次に、「にけり」と「てけり」の用例数に関しては、「にけり」が約二百三十例を数えるのに対して「てけり」はわずかに数例という極端な差があつたのだが、「にき」と「てき」の用例数に関しては、「にき」六例に対し「てき」が四例とほぼ拮抗している。「にけり」と「てけり」のアンバランスは、「けり」の主観性用法が「にけり」のみに偏るためであり、「けり」が時制辞として機能している場合において「にけり」も「てけり」も数例ずつという少ない用例数で拮抗する、ということを前節で述べた。「にき」と「てき」の用例数も、「けり」が時制辞として機能している時の「にけり」と「てけり」のように、少ない用例数でバランスが保たれている。このこともまた、「けり」の主観性用法に相当するものが「き」の方には存在していないということを示している。

また、「けり」には「けり」で述べられた事柄そのものを疑う疑問文がなく、そのことは、「けり」が事柄の確実さの認定に働くことの証左でもあつたのだが、それとは対照的に、「き」には「き」で述べられた事柄そのものを疑う疑問文の実例がある。

②⑥ 夜昼といふ別知らず我が恋ふる心はけだし夢に見えきや「所見寸八」(七一六)

②⑥の例を含めて、萬葉集全体で八例存する「きや」は、いずれも事柄そのものへの疑念を表わしている。

以上に述べてきたような事実は、「けり」が「事柄の確実さの認定」という意味を核として、その結果、時制辞としての性格と主観的要素としての性格とを持ち、場合に応じて一方(または両方)を顕在化させていたのとは異なり、「き」の方ははっきりと〈過去〉を表わす時制辞である、ということを示している。

「き」が「にけり」とは異なり、常に確固とした時制辞として働くものであるということは、「けり」と「き」とに共通する用法を比較してみれば明らかに判る。例えば、「ずけり」と「ずき」とを比べてみると、「ずけり」の方は、

②⑦ 奈良山の峯なほ霧ふうべしこそ籬が下の雪は消ずけれ「不消家礼」(二二二六)

など、時制で言えば〈現在〉のものが多く、全十一例中、どうしても〈過去〉と解釈しなければならないような例はない。「ずき」の方は逆に、

②⑧ 情ゆも我は思はずき「不念寸」山河も隔たらなくにかく恋ひむとは(六〇一)

など、三例ともに明確に〈過去〉を表わしている。また、「き」が動

詞に直ちに下接する例を見ても、すべて「過去」を表わしている。

ところで、今、「けり」と「き」とが語頭字音を同じくすることを、両者の語源的関連のあらわれと解するならば、語形から考えて「けり」が「き」から派生したのであり、その逆とは考えがたい。そうであれば、「き」の欠点を補うために「けり」が派生させられたものと見るのが合理的である。その「き」における不足とは次のようなものではなかっただろうか。

◎「けり」は「き」から派生したものであり、「き」の用法を次の二面において補足する。

(1) 文中用法

(2) 主観的ニュアンスを添える用法

けり		き
(2)	(1)	
文末	文中	文末
主観的意味	時制的意味	時制的意味

ちよど繫辞の「に」が助動詞「なり」を展開せしめたように、「き」は「けり」という助動詞を展開せしめたのではないが、語源を異にする「し」「しか」との間に「活用語」としての連帯を生じさせる以前の段階においては、時制辞「き」は「き」の形しか持たず、従って終止法として文末に用いられるだけであったのだが、ラ変に展開して「けり」となることで文中での用法を確保することが可能になったわけである。同時に、文末にあつては事柄の確実さを主観的に（のみ）主張するという用を、「き」のラ変への展開がはたしていると言えるだろう。「けり」が「き」から独立し、「き」が「し・しか」と合体して「けり」とは別系統の助動詞を結果的に構成する前の段階として、このような状態を想定してみることも可能であろうと思わ

れる。

## 七、古今集の用例との比較

最後に、古今集における「けり」の用法との比較によつて、万葉集の時代から古今集の時代に向けてどのような変化があつたのか、その大枠だけでも見届けておきたい。

古今集において先ず目立つのは、終止用法以外の用例の少なさである。全二百十数例の「けり」のうち、終止用法以外で（即ち文中に）用いられたのは次の二例のみである。

㊸ 心ざし深くそめてし折りければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ  
（古・七）

㊹ 手も触れて月日経にける白檀弓起きふし夜はいこそ寝られね  
（古・六〇五）

このうち㊸は、「白檀弓」への連体修飾ではなく「経にける」で文が終止している可能性（連体止め）もあり、もしそうであるとすれば古今集における非終止用法の「けり」は㊹のただ一首だけということになつてしまう。もちろんこのことの背景には、古今集が万葉集よりも歌の絶対数が少なく、しかも「けり」の文中用法は短歌よりも長歌の方が出現率が大きいのであるが、長歌の比率が古今集は万葉集に比べて極めて小さいという事情があることは否めないけれども、そのような事情を考慮してもなお、この文中用法の少なさは注目値するであろう。

もうひとつの目立つ事実は「なりけり」の激増である。万葉集では「けり」の全四百数例のうち「なりけり」が二例、「にありけり」が二十二例で、両者合わせて約六%を占めるに過ぎなかったものが、

古今集では「なりけり」が四十三例、「にありけり」が二十四例認められ、「なりけり」だけで全体の約二十%、「にありけり」を合わせると約三十%にも達してしまふ。しかも、万葉集の「にありけり」には終止法でない用例が五例（二十三%）含まれているのに対して、古今集の「なりけり・にありけり」には終止法でない用例が一例もない。

既に述べたように、文中用法は「けり」の時制面＝非主観的側面が前置化する用法であるから、それが乏しいということは、少なくとも古今集に用いられるような歌語としては、「けり」は時制辞としての性格を後退させたということになる。その一方で、「なりけり・にありけり」のような定型化がすすんでいるのである。古今集の「なりけり・にありけり」はほとんど全例が眼前の事物に対する「発見」であつて、「けり」が主観的ニュアンスを添える要素として一層強固に確立したことを表わしている。

「けり」が「き」という純粹な時制辞から分化して生じたものであるという前節の仮説が正しいとするならば、これは主観表現という一つの方向における分化の完成であつたと言えるであらう。あるいは、

㊶ 夢とこそいふべかりけれ世の中にうつつあるものと思ひけるかな（古・八三四）

などのような明確に時制辞として機能している「けり」の用例も存することを見ると、むしろ、時制辞としての「けり」と主観的ニュアンスを添える「けり」との分極化が、古今集に至つてますます進んだのだと言ふべきであるかもしれない。

以上、万葉集の「けり」は基本的には事柄の確實さを認定するための要素であり、①動詞に下接した「けり」は〈過去〉〈現在〉（または〈超時〉）を表わす時制辞として働くこと、②特に終止法以外で（即ち文中に）用いられた動詞下接の「けり」には〈過去〉を表現することが多いということ、③形容詞下接の「けり」は時制ではなく「発見」や「詠嘆」など主観的ニュアンスを添えるために用いられていること、④「ぬ」と熟合して「にけり」の形で用いられた「けり」は形容詞下接の「けり」に類似していること、などを述べた。「けり」が散文に用いられたときにも同じことが言えるのか、助動詞「たり」との関係はどうか、文中用法「ける」「けれ」と「し」「しか」とはどのような関係にあるのか、など、残された問題は多いが、今後の課題としたい。

注1 「けり」の学史については文献⑩が詳しい。

注2 万葉集の「けり」及び「き」の用例の採集に際しては文献⑨の恩恵を受けた。古今集の「けり」の用例は小学館日本古典文学全集を用いて採集した。

注3 属性（この自動車は電気で動く）・習慣（うちのボチはカステラを好んで食べる）・普遍的真理（水は摂氏百度で沸騰する）・一般的傾向（夕焼けの翌日は晴れる）などを一括して、「属性・習慣など」としておく。

注4 文を二種類に分けてそれぞれの性格を論ずるということについては、文献④・⑤などから示唆を得た。但し、ここでの二分類は文献④・⑤の「形容詞動詞文」という二分類とは異なるものになっている。

注5 文献①が、現代語の「た」について、アルコトの表現に用いられた場合とデキゴトの表現に用いられた場合とで表現性が異なるということを指摘している。

注6 文献②に指摘されている。

注7 川端善明氏(文献⑥)は、「すべての動詞文述語は、その述語的表現にあつて何らかに時間的意味を持たざるを得ない(傍点は原文)とい述べている。この考えに従う。なお、動詞文述語のうち、「た」「ている」など広義完了の側の述定形式について、尾上圭介氏(文献③)は、「動詞を述語としつつ「話者の絶対的現在におけること」の存在」を主張するためには、何らかの方法によって、動作や変化という継時的な動詞自身の意味を存在の表現に持ち込まなくてはならない(傍点は原文)と述べている。「けり」の時制面の由来に関する本稿の把握は、文献③のこの把握と、大きく見れば重なるものであろう。

注8 文献⑧などの見解に従う。

注9 このように考えることは、いわゆる「完了の助動詞」の時制的な意味と言語主体の確信とを融合的に捉える点では、文献⑦の「広義完了」や文献②の「最広義完了」という了解のしかたと同趣である。但し、本稿では「事柄の確実さの認定」を「けり」の固有の意味と見なしており、これを「つ・ぬ・き・たり」や「た・てている」にまで積極的に適用する意図は、いまのところない。

注10 この段落の内容については尾上圭介先生から御教示をいただいた。

注11 この解釈については尾上圭介先生から御教示をいただいた。

注12 文献⑪による。

△文献

①大鹿 薫久「未完了・完了・未来・過去」

(山辺道 二六号 一九八二)

②尾上 圭介「現代語のテンスとアスペクト」

(日本語学 一卷二号 一九八二)

③同 「日本語の構文」

(国文法講座六卷 一九八七)

④川端 善明「形容詞文」(国語国文 二七卷二二号 一九五八)

⑤同 「動詞文・格」(国語国文 二八卷三号 一九五九)

⑥同 「形容詞文・動詞文概念と文法範疇」

(『論集日本文学・日本語』5巻 一九七八)

⑦同 「活用の研究II」(大修館書店 一九七九)

⑧金田一春彦「不変化助動詞の本質」

(国語国文 二二卷二・三号 一九五三)

⑨小路 一光「萬葉集助動詞の研究」(明治書院 一九八〇)

⑩鈴木 泰「き」「けり」の意味とその学説史」

(武蔵大学人文学会雑誌 一六卷三・四合併号 一九八四)

⑪中西 宇一「発生と完了」(国語国文 二六卷八号 一九五七)

——神戸大学大学院博士課程学生——

(平成元年二月三日 受理)